

オーディオ再生上のやっかいな問題—その 3
—イコライザーカーブとその位相—

オーディオを始めて以来、次のようなフォノステージを有するプリアンプやフォノイコライザーの変遷を繰り返してきました。

プリアンプ

Lux CL-30・CL-36

Leak Point 1

しなの音蔵 オリジナルプリアンプ

Brooklyn DAC+ (DAC プリ)

フォノイコライザー

47 研 4718

iFi iPhono

ZANDEN Model 120

しかしながら、それらのイコライザーカーブがどのような回路設計かなど分からないまま、音の違いの大きさに驚きながら、知識もないまま入れ替えに推移してきました。

そして、その一で述べましたように ZANDEN のフォノイコライザーを知り、LCR 型の回路ということもあって、アキュフェーズの C-37 と C-47 および Phasemation の EA-350 と EA-550 などとの比較試聴の上、ZANDEN Model 120 を採用に至りました。

なお、アナログデータをいったんデジタル化し、各種のイコライザーカーブのデジタル処理を行った上、アナログに戻すという M2TEC のフォノイコライザーの試聴会にも行きましたが、音質はしっくりきませんでした。

この間、イコライザーカーブの設計は NF 型、CR 型、NF・CR ハイブリッド型、LCR 型などがあり、CR 型は位相がずれるが、LCR 型はずれにくいなどの情報を得ましたが、それらを証明するデータや音質との関係は情報がないままでした。

特に、ほとんどのフォノイコライザーに採用されている NF 型イコライザー回路の位相はどうなっているか疑問でしたが、検索してみつけた資料の NF 型イコライザーを Study するによれば、回路設計により、かなりの位相のずれが起こり、またそのずれは周波数によって変わってくるということのようです。以上のように、どのようなタイプのイコライジング回路の位相がどうなっているかは、依然として不明のまま、位相がずれにくいと称されている LCR 型の

ZANDEN Model 120 をメインに使っています。

【資料リスト】

資料 3-A [NF型イコライザーをStudyする](#)

以上